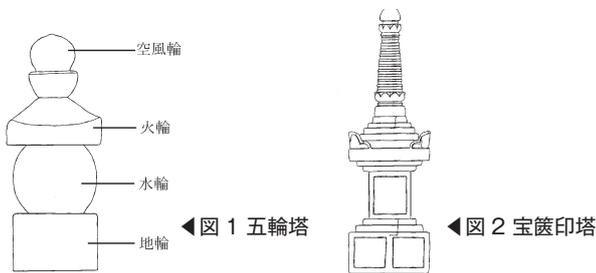


ふるさと 見て歩き 第111回
市内の五輪塔を探して

市内には多くの「五輪塔」や「宝篋印塔」があります。どちらも主に中世（平安時代末・鎌倉・室町・戦国時代頃）のお墓や供養塔として使われた、石塔の一種です。当時はこのような石塔をお墓に建てることのできたのは、武士や僧侶といった身分のある人々の可能性が高いのですが、墓誌が刻まれてないものも多く、いつどのような目的で建てられ、どのように使い分けされていたのかなどの詳しいことはわかっていません。



宝篋印塔は佐竹氏の墓などで注目されることも多く比較的研究がされているので、今回は五輪塔についてお話ししましょう。

五輪塔は世界の全てを構成しているとする地・水・火・風・空の五つの要素（五大）を表す4つの石（空風輪・火輪・水輪・地輪）で作られています。

石を重ねただけでバラバラになりやすいため、重ね方が違っていたり、宝篋印塔と合体していたり、一部のみが畑のわきなどにそれと知られず転がっていることもあります。

五輪塔は土饅頭の上に建てられた木製の卒塔婆が石製に変わったことに始まると考えられており、平安時代の末期には京都近辺で作られていました。

鎌倉時代には関東に広まり、大型のものが茨城県南部に多く残っています。この頃の五輪塔は、一つ一つのパーツの角がシャープで丁寧に加工されています。

室町時代になると空風輪が大きくなり、火輪の反りが弱くなります。水輪もつぶれたような形になっていきます。

戦国時代には空風輪の丸みが無くなり、空輪と風輪の間に刻みを入れるだけの表現が多くなります。曲線や角はより退化しシャープさは失われます。さらに簡略化が進み、小型の五輪塔が急激に増え、個人の供養塔が造立される傾向が強まります。小型だと倒れやすいため一石や二石でつくる五輪塔も現れます。



▲ 図3 形の変遷 (左:空風輪 右:火輪)

ちなみに、近畿地方北部では舟形の石に五輪塔を刻んだ舟形五輪塔が多いのですが、これが後の江戸時代に、墓誌が刻まれただけの先が尖った墓石につながっていくと考えられます。

以上の歴史から、市内にある五輪塔の多くは戦国時代後半から近世初頭のものが多いと推測できます。ただし、全国的な変遷とは異なる形態のものもあり、周辺地域を更に収集・分類することで明らかにしていく必要があります。多くは小田野地区で見ついているような形（図4）で、近隣市町村のものと近似していますが、山方の常安寺にある五輪塔群（図6）などとはとても独特な形をしています。同寺にある大型の五輪塔（図7）を模した可能性が考えられますが、近隣に類似の五輪塔が無いため、はっきりしたことはいえません。

五輪塔は、中世の城館跡周辺で見つかる場合が多いようです。現在確認している市内の城館跡は40か所ほどですが、茨城城郭研究会によると70か所近くにもなります。市内の集落の多くが、これらの城館を中心に形成されているので、皆さんの周辺にも五輪塔の一部が何気なく転がっているかもしれません。一見ただの石ですが、戦国時代に生きた武将の墓石の一部だと思えば、見え方も変わってくることでしょう。

発見された方は、ぜひ情報を教育委員会文化財担当者までお寄せください。



▲ 図4 小田野城麓五輪塔群



▲ 図5 宇留野向福寺五輪塔



▲ 図6 常安寺五輪塔群



▲ 図7 常安寺大型五輪塔

■ 問い合わせ ■

文化スポーツ課 文化スポーツグループ ☎ 52-1111 (内線 343)